

慶応SFCのテクニカルライティング講座(2)

君島 浩
富士通ラーニングメディア

抄録

この第2回の報告書は慶応義塾大学湘南藤沢校舎のテクニカルライティングについての私の教科書とクラスの最新状況を述べる。私の講座は地球標準の学校作文講座の日本語版である。教科書は随筆スタイルではなく純然たる教材のスタイルで新しく出版したものである。講座は部分的に再設計した。電子学習道具の活用の改善についても述べる。

A Technical Writing Course
At Shonan Fujisawa Campus of Keio University (2)

Hiroshi Kimijima
Fujitsu Learning Media

Abstract

This second report describes the current status of my textbook and class on technical writing at Shonan Fujisawa Campus of Keio University. My course is the Japanese version of global standard academic writing course. The textbook is newly published in not essay style but pure training material style. The course is partially redesigned. I also improve the usage of electronic learning tools.

(本講座が教えている文段構造の見本として、本稿の各文段の話題文を下線で示す)

1. はじめに

私は1997年度から慶応義塾大学湘南藤沢校舎のテクニカルライティング講座の講師の一人になった講座名はテクニカルライティングであるが、私は地球標準の学校作文講座を開発して実施して、初年度の講座の内容を本研究会へ報告した。その後、経験や調査を元にしていろいろな改善を重ねてきた。この主題は、情報技術教育と作文教育の境界に位置するし、講師や教科書による教育と情報技術を手段とする教育との境界に位置する。

本稿は1997年度に対する2000年度の講座の新しい部分を述べる。第一に、講座が系統的になるように構成や細部を改善した。第二に、初めて教科書を執筆・出版した。純然たる教科書のスタイル

の類書は大学・高校向けには存在しないと思う。第三にコンピュータの進歩に合わせてウェブ資料を開設し、スライドの図や写真も充実させた。

2. 講座の位置づけとクラス人数

テクニカルライティング講座は湘南藤沢校舎を構成する二つの学部の共通専門科目の一種である。クラスは二つあり、もう一人の熊坂先生は講座名通りのテクニカルライティングを指導し、私は学校作文(アカデミックライティング)を指導する。2000年度の私のクラス人数は約160名である。地球標準の系統的な作文技法はこのような大教室でも指導が可能である。日本古来の添削に頼る作文教育のクラス人数なら30名が限度であろう。

3. 講座の概要

講座の概要を少し変えた。目的や学習目標は1997年度と変わりはない。シラバスを次のように変えた。

週	1997年度	2000年度
1	導入	導入
2	分析	分析・宿題提示
3	粗筋設計	設計
4	表題部	表題部
5	宿題の発表と提示	宿題の講評と提示
6	序章	序章と終章
7	項	文段と話題文
8	宿題の発表と提示	宿題の講評と提示
9	表現1(文)	補足文
10	表現2(用語)	文
11	宿題の発表と提示	宿題の講評と提示
12	発表1(スライド)	言葉と文字
13	発表2(語り)	発表
14	宿題発表とまとめ	宿題講評とまとめ
15	筆記試験	(レポート評価)

文段・話題文・補足文の単元を増やして、発表の単元を減らした。その後の調査でこれらの話題の指導に役立つ素材が増えたからである。また、筆記試験をやめてレポート評価に変えた。系統的作文技法は筆記試験でも評価が可能だが、学生の意見も入れてこちらも試してみるために変更した。

教科書「日本語作文作法」を出版するに当たって、用語を見直した。例えば、いわゆる段落を意味する用語を「項」から「文段」へ変えた。ある国語辞書で文段という用語を発見したからである。

2000年度は作文する主題を各学生に決めさせるように変えた。自分が既に熟知している主題を選ばせて、作文過程の思考に専念させる。以前は講師が共通の主題を与えたので、未知の主題を調査しながら作文することになる。実際の作文は時間をかけて調査した結果を、後で作文するということが多いので、実際に即した指導法がよい。学生が決めた主題の実例のいくつかを次に示す。

- ・次世代音楽メディア
- ・広島の公共交通機関
- ・オーケストラの運営
- ・国家緊急権と憲法
- ・沖縄県の基地問題

講師が全学生に一つの主題を与えていた1997年度に比べて、講師の労力は増えてはいない。文章の構造的に着目して評価するので、異なる主題でもそこそこの時間で公正な評価ができた。盗作がしづらいのも長所だが、意図したわけではない。

4. 教科書「日本語作文作法」

1999年度のプリントを土台にして教科書を執筆して出版し、2000年度からの講座の推薦図書にした。拙著には次のような特徴がある。

- A5判である。文庫判はこれより文字数が2割程度少ないし、手を離すと閉じてしまう。
- 作文の重要性を訴えるなどの能書きがなく、淡々とした教科書に徹している。文字数も多くて能書きが少ないので内容が豊富だ。
- 一般人向きではなく、学校向きに2ページごとの練習問題や章末問題がある。
- すべての文段を話題文で始めるという手本を示している。類書のほとんどは推奨する作文技法をその本自身に徹底していない。
- 作文に必要な工程、粗筋設計、文段構築、文構築の技法をすべて網羅している。類書の多くはこれらの一部しかカバーしていない。拙著が1年半目に四刷に到達したという実績について考察する。
- 技術系出版社であるため数千部程度の企画も採用してくれる。数万部を狙う出版社は教科書スタイルの企画を採用しにくい。
- 企画時のインターネット調査で、全国の作文講師が適当な教科書がなく困っている状況を私は察知していた。
- 教科書なのでまとめ買いがある。買ったと推測される学校は、慶大、東外大、東洋大、日本工学院、東横女子短大、札幌大などだ。
- インターネットによって認知度が上がった。出版社、私、通信販売会社や作文講師のウェブ情報が出版部数の増加に役立った。
- インターネットで立ち読み相当の効果を出すために、拙著の粗筋相当の情報をウェブで公開した。

ベストセラーの大野晋著「日本語練習帳」がウェブでも話題になっているので考察する。

- ウェブでは大野本を賞賛する人も批判する人も多い。人気の理由を考察する人も多い。
- テレビ番組では佐高信氏が「これがどんな本なのかというより、これを買ったのがどんな人なのか」というようなことを発言した。
- 私の推測では日本語練習帳を好むのは文章を読むことが好きな人文系の人である。本多勝一著「日本語の作文技術」は報道記事を書く社会学系の人好む。木下是雄著「理科系の作文技術」などは学術論文を書く理工系の人好む。
- 数学や理科の不得意な人が人文系に集まるので、系統的な作文技法の本多本や木下本を難しいと思うのだろう。社会学系や理工系の方は仕事のために少数の本を買うが、人文系の方は仕事外のために多数の本を買う。
- 「大野本はあれだけ売れる価値はない」と批判するのは、人気のある読売巨人軍をやっかむのと同じである。問題はファンにある。
- 日本の文学科は芸術学部には属しておらず、詩作法や小説執筆の講座や制作演習がない。人文系の教育を強化すれば、詩や小説に挑戦する人が増え、高度な作文教科書が増える。困難さから逃げるために人文系を目指す人が減る。音楽の聴取は簡単だが作曲は難しい。
- 詩や小説の作文方法を教える教科書は、それ自身は実用書である。芸術作文派と実用作文派とに分かれて論争するのはおかしい。

拙著の場合は、木下本並みの系統的な本であって、しかも湘南藤沢校舎という文科系の場合で使うことができる。それができる第一の理由は、市販本と違って単位を取るといふ動機があることである。クラスに登録してしまえば、いやでも系統的技法を修得する必要がある。第二の理由は、学内の多くの講座が演習や修了評価で報告書を要求するので、必要に迫られていることである。第三の理由は、本多本や木下本よりも作文の各局面の方法を網羅していることである。

5. 講座形態の改善

2000年度からシラバスやプリントを私のウェブサイトへ載せるようにした。プリントを複写して運搬する労力が減った。欠席した学生とプリント請求のやりとりをする手間もなくなった。ウェブプリントはカラーなので魅力的になった。交流のある宮城大学などの学生や講師が慶応の授業の様子を参考にできるようになった。

従来はOHPや白板を使っていたが、教室やノートパソコンの変化により電子スライドを使うようになった。ウェブプリントを映写することもあるが、ほとんどはプリントよりも字の大きい視覚的なスライドを別に作っている。写真や動画を併用することによって、言語的学習が好きな学生にも視覚的学習が好きな学生にも対応できる。例えば立法に関する話題には議会の写真を使う。



電子メールの利用は試行錯誤中である。電子メールは宿題の提出や質疑応答に使う。クラス人数が多いので、2000年度は宿題の提出は電子メールから校舎事務局への印刷物提示へ変更した。しかし、どちらでも講師の労力は大差ないようである。

6. 単元・章ごとの改善

講座の単元、教科書の章ごとの改善点を挙げる。

第1回「導入」:「まえがき」「1. 概要」

この単元は登録勧誘と本論基礎を兼ねるように、慎重に再設計した。白板しかない100名教室からあふれる仮登録学生に、ウェブのシラバス、教科書の「まえがき」を解説した。後半の概要授業は基礎に入りつつ講座形態の見本を示して、魅力を具体的に体感させる。この結果、約160名が登録して、場所を大教室へ変更してもらった。

第2回「分析」:「2.分析」

1997年度は分析の道具として付箋紙を紹介したが、2000年度はコンピュータの普及に合わせてスプレッドシート、発表ソフトウェア、ワードプロセッサの三つを紹介した。分析の方法だけを教える、そのための道具は各自に選ばせるということが大切である。本講座は情報リテラシー教育を兼ねてはいるが、コンピュータ主体の発想をしないように慎重に設計してある。講師自身もウェブやスライドを道具としてさりげなく使ってみせる。

著作物の複製行為の説明を洗練させた。著作物を積極的に取引するように教える。複製行為は市場取引の一種であり、著作物を学会で発表するのは倫理的行為の一種でもある。知識ではなく行動を教えるのが私のような教育設計専門家の特徴だ。情報教育の世界ではマナー、法律、倫理の区別のできない教育者が多い。特に作文の教育者は言葉を厳密に使わなければならない。

学期を通じて一貫して扱う主題を決めて、分析結果を提出するという宿題を提示する。前に述べたように共通の主題を与えるのをやめて、各自が「大学活動の範囲内で、既に熟知している主題」を探すように変えた。

第3回「粗筋設計」:「3.設計」

この単元は系統的な作文の山場の一つだが、1997年度と比べてあまり変わらない。従来は白黒プリントと白板で説明していたのが、教科書、ウェブプリント、写真入りスライドを併用できるようになった。設計という抽象的な話題の説明が容易になった。授業評価が「中の中」から「中の上」へ変わったのは、この辺が貢献しているようだ。

第4回「表題部」:「4.表題部」

抄録の指導に後の単元の文段・話題文・補足文の初歩を含めるように改善した。提示、定義、差異、結果、詳細などの文種類を例に挙げる。この単元は表題部を構造的に教えてきたという意味で、もともと類書より進んでいる単元であった。

第5回「分析宿題の評価」

各自が分析した結果を講師が講評する。事前に提出物の抜粋をウェブサイトへ載せ、授業の時に

それを映写して講評した。前年度までは学生を壇上に招いて対話式で講評した。しかし、5～6人ぐらいしか扱えないのはつまらないという意見が授業評価で出てきた。

新方式はウェブ作成の労力が増えるが、一人分3行の寸評として、50人分ぐらいは取り上げることができる。各自の提出物を透明シートに焼くのと違って、大きな均質な文字にして、カラーや写真を使って表示できる。



テキサスの円形の畑

宿題提出物をウェブサイトへ掲載すると、ほかの大学の講師や学生も参考にできる。湘南藤沢校舎の特徴はほかの大学よりも宿題が多いことであり、それが生々しく伝わる。ただし、内容によっては公開しにくいことがあるので、他者批判の部分や個人情報の部分の掲載は慎重にした。

第6回「序章と終章」:「5.序章と終章」

ここも類書より進んでいると自負している単元である。やはり話題文や補足文の初歩を盛り込んで、序章や終章を書く能力を増しつつ、後の単元の準備を兼ねるようにした。また、階層構造などの説明の部分を、カラーの木構造図で映写するようになった。

ウェブページの中に挿入する図の作成には、スプレッドシートを使った。表の欄を方眼ブロック用紙のように使えるからである。最初は発表ソフトウェアを使っていたが、方眼機能がないので位置決めが難しかった。

第7回「文段と話題文」:「6.文段」「7.話題文」

この部分は系統的な作文の山場の一つなので、従来は一単元だったのを二単元に分割した。また、話題文の説明と文段構造の説明を混在させた。以前は文段構造をまず説明したが、抽象的で分かりにくいようだった。

第8回「粗筋宿題の評価」

この単元は第5回単元と同様な変更しかない。「成果を中心にする」「前置きを減らす」「時間順でなくす」などの方式を具体的に助言する。取り上げる学生数が以前よりも増えたのと、学生ごとに別の主題を選ぶように変えたので、どんな場合でもこの方式が適用できることを説得できるようになった。

講師の語りには工夫を凝らした。単調な講評の繰返になりがちなので、政治、経営、情報技術、対人関係などの専門的な主題ごとに、講師の人生経験による観点や意見を話すようにした。

- スポーツにおいてガッツポーズをするのは、許されることか規則違反かマナー違反か。
- 家庭生活の枠組みないのか。家政学部のカリキュラムが参考にならないか。
- 戦争犯罪批判の読者は政治・軍事・法律・作文の上級者と思え。情緒的な感想文は通用しない。

この講座自身が作文だけではなく、スライドや語りや質疑応答の手本を示すようにしている。数年間の経験と改善によって、この講座の媒体混合（メディアミックス）は巧妙になった。作文指導で精一杯というのではなく、作文は伝達の一部であるという大所高所の観点で指導する。「人間が即興で話せるのはなぜだろう」「それは作文技法と何か関係するのではないか」などを考えさせたり、具体的に問いかけたりする。

第9回「補足文」：「8．補足文」

補足文の単元を独立させたので、内容を豊富にした教科書執筆の時に事例を吟味した 例えば、次の例は結果から原因に逆上っていくという「原因の補足文」を使った文段である。

貴ノ浪の大関陥落が決まった。連続負け越しなら陥落という規則があるからである。けいこ不足が負け越しの原因である。体調不良のためにけいこを十分にできなかった。

ウェブプリントやスライドを視覚的にした。補足の関係を矢印で示したり、文と文をつなげる語句に色を付けたりするなどである。

第10回「文」：「9．文」

この単元は大幅に変えた。文の構造をBNFや木構造図で表していたのを構文図に変えた。この方式はスペースを食うが理解はしやすい。



できるだけ単純な文にすることを、コンパイラと同様の生成規則として説明する。文の原案の中から、素直に主語を選ぶこと、素直に目的語を選ぶこと、素直に述語を選ぶことを教える。逆茂木文を添削するような指導法は1997年度から避けていた。生成規則による指導が、構文図を使うことで更に理解しやすくなった。

構文図を使う改善も電子手段と関係する。斜めの線をきれいに描くことが、私自身の情報リテラシーの向上によって容易になった。2001年度には図形ソフトウェア（MS Visio）を導入するので、更に描画が洗練される予定である。

第11回「話題文宿題の評価」

粗筋を構成する話題のすべてを常体の話題文に直す宿題の提出物を講評する。以前はいくつかの文段の構成を分析させたが、今期はそれを第14回へ移した。粗筋を話題文に直す方が作文の順序や学習の順序として妥当だからである。

ほとんどの学生が短くて単純な文を書いている。粗筋の話題を一つずつ文に直そうとすると自然にこうなる。話題をいきなり文段に直させたり、粗筋なしで文段を書かせると、文が複雑になりがちである。文段の構造と文の構造を同時に検討するのは能力を超えるからである。

大教室での授業や添削なしの授業が成功する理由はこの辺にある。作文の方法を解きほぐして指導すれば、形の悪い文章はもともと書かないのである。方法に重点を置いた授業は、数学や理科の授業に似た雰囲気になり、一方通行的な授業でも相当な学習ができるようになる。

第12回「言葉と文字」：「10．言葉」「11．文字」

細かな改善をした。ここは単調な話題なので科学的な解説や話術が大切である。

第13回「発表」: 教科書には該当する章なし

文段の説明を充実させるために、二つだった発表技法の単元を一つに減らした。その代わり後で自習できるように、大量かつ凝ったウェブプリントを作った。「日本語作文作法」の姉妹編「日本語発表作法」の原稿を執筆中だったので、その原稿や写真を流用した。教材の半分ほどが語りや質疑応答の系統的な方法である。質疑応答には文章の文段構造を応用する。また、語りや質疑応答には原稿準備は、作文と関係することを述べる。

実際の授業はノートパソコンを映写機へ接続するのに失敗して、白板で説明するという惨憺たるものになった。それを逆手にとって「語りが発表の中心なのだ」ということを実践してしのいだ。ここを直せば次期の授業評価の得点はよくなる。

その後、出版した「日本語発表作法」は「日本語作文作法」以上に類書のない本である。諏訪邦夫著「発表の技法」は良い設計で十分に役立つ優れた本ではある。拙著も全体の設計は諏訪本と同じだが、各種の細かなノウハウを盛り込んだ。

ただし、「日本語発表作法」の出版部数は「日本語作文作法」ほどは伸びていない。第一の理由は、作文に比べると実施されている講座の数が少ないことである。第二の理由は、有名な本が諏訪本ぐらいしかないので、教科書に使える本を検索するという気が起きにくいことだろう。

第14回「文段宿題の評価」

以前は最終試験の雰囲気予告する知識試験を宿題にしていたが、今期からはいくつかの文段を書いて構造を解説する宿題にした。これにより最初の宿題から最終レポートまで、一貫した主題を処理することになった。全体の百点満点の中で4回の宿題に40点を配点するので、宿題に対する動機は高い。授業単元の内容が宿題を処理することにすぐに役立つので授業単元の動機も高い。

また、4回の宿題は最終レポートの設計・準備でもある。宿題をまじめにこなして講評で助言をもらえれば、加速度的に最終レポートの成績が上がる。これらの全体的な関係が、以前に比べてはっきりしたものになった。

7. おわりに

慶応SFCでの作文の講座の2000年度の新規な部分を述べた。変更したのは、全体の構成や細部の改善、新しく執筆した教科書の利用、ウェブ資料やスライドの導入・改善である。学際的な話題でしかも改造の話題なので、特定の技術の発明ということではないが、授業評価が「中の中」から「中の上」に向上する結果をもたらした。

参考文献

- [1] 木下是雄, “理科系の作文技術”, 中公新書, 1981.
- [2] M.Arnaudet 他, “Paragraph Development”, Prentice-Hall, 1981.
- [3] 本多勝一, “日本語の作文技術”, 朝日文庫, 1982.
- [4] 花田昌子他, “アメリカ小・中・高校教育マニュアル”, 日本経済新聞社, 1993.
- [5] 林達夫, 久野収, “思想のドラマトゥルギー”, 1993. アリストテレスが対話を重視していたことは、作文しか視野にない教育者に警鐘になる。この本自身が対話の記録である。また、アリストテレスが詩作学に取り組んでいたことは、解釈論しか視野にない教育者に警鐘になる。
- [6] 君島浩, “慶応 SFC のテクニカルライティング講座” 情報処理学会研究報告 98-CE-47, 1998.
- [7] 大野晋, “日本語練習帳”, 岩波新書, 1999.
- [8] 君島浩, “日本語作文作法”, 日科技連出版, 2000.
- [9] 君島浩, “教育設計研究室”, <http://www2.tokai.or.jp/kimijima/>
- [10] 君島浩, “日本語発表作法”, 日科技連出版, 2001.
- [11] 松井剛, “論文作成に役立つリンク集”, <http://tmatsui.virtualave.net/links/method.html>